

# あたらしくはいった本 (令和3年5月 貸出開始資料から)

- 小説 小説8050(林真理子/著) ひきなみ(千早茜/著) 臨床の砦(夏川草介/著) 小島(小山田浩子/著) にぎやかな落日(朝倉かすみ/著) 百合中毒(井上荒野/著) めぐりんと私。(大崎梢/著) ブックキーパー脳男(首藤瓜於/著) 破天荒(高杉良/著) 緑陰深きところ(遠田潤子/著) 最高のアフタヌーンティーの作り方(古内一絵/著) エレジーは流れない(三浦しをん/著) キリギリスのしあわせ(トーン・テレヘン/著) ミカンの味(チョナムジュ/著)
- 随筆・詩などの文学 地上絵(橋爪志保/著) 東京ディストピア日記(桜庭一樹/著) くらすたのしみ(甲斐みのり/著) キャンプ日和(大町桂月/著ほか) 鴻上尚史のますますほがらか人生相談(鴻上尚史/著)
- その他の本 13歳から分かる! プロフェッショナルの条件(藤屋伸二/監修) 江戸の秘密(竹村公太郎/著) 10代からのSDGs(原佐知子/著) 認知症になった蛭子さん(蛭子能収/著) おとな世代の暮らし替え(岸本葉子/著) 一度きりの大泉の話(萩尾望都/著)



『小説8050』  
林真理子  
新潮社



『ひきなみ』  
千早茜  
KADOKAWA



『臨床の砦』  
夏川草介  
小学館

●新型コロナウイルス感染拡大防止のため、来館の際はマスク着用などのご協力をお願いします。

## みんなの としょかん



市民図書館  
TEL (921) 4646  
FAX (921) 4896  
<http://www.library.dazaifu.fukuoka.jp/>

## としょかんカレンダー

令和3年	日	月	火	水	木	金	土
7					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	31

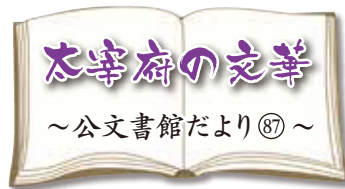
○のついた日は休館日

金・土曜日(祝日を除く)は午後7時まで開館しています。

## 水城村での天然痘ワクチン接種

現在は根絶している天然痘は、非常に強い感染力で致死率も高く、一度罹患すれば終生罹ることはないものの、回復しても重篤な後遺症が残る恐ろしい感染症です。紀元前から存在し、日本では6世紀以降流行が繰り返され、江戸時代には誰もが思う恐れのある病として定着しました。明治に入ってから数度の流行がありましたが、着実に「種痘」の普及により抑え込みに成功しています。種痘とは天然痘のワクチン接種のことで、明治期にはワクチン保存法の開発や全員接種を目指した取り組みがなされ、明治42(1909)年に「種痘法」が成立、全国で定期的に種痘が行われるようになりました。

古い役場文書を見ると、旧水城村での種痘実施についての事績が確認できます。村長から区長に宛てた照会文の控えですが、「来る19日、午前10時より関屋・竹森屋において秋定期種痘」を施行するため「別紙各人へ堅く出頭」するよう達しを出してほしい、と書かれています。明治36年



～公文書館だより⑧～

10月16日の日付で、村ではこの頃すでに定期的な種痘が場所を指定して行われていたこと(後には春に実施)、村で対象者の名簿を調整し、個々に宛てて区長名で通知が出されていたこと、忌避対策の一つか、病気を理由に接種を見送る場合には医師の診断書が必要としたことなどが分かります。

また、現在明治44年以降が残されている旧水城村の事務報告書には、大正期にかけて種痘結果の簡単な統計が掲載されています。当時村の人口は約3千人程度で、例年120人から、多い時には230人近くが接種の対象となりました。「善感」(免疫の獲得成功)と「不善感」の人数からその割合を出してみると、年ごとの差は大きく、良くて善感が被接種者の6割、時には不善感が善感を大きく上回る年もあり、種痘が普及したとはいえず、ワクチンの効果がなかなか安定しなかった様子が窺われます。

太宰府市公文書館 藤田理子